

## 【レポート】

自治研活動に若手世代である青年部を組み入れ、職場・世代の枠を超えた話し合いを行いながら進めた経過と具体的な取り組み、そして今後の展望について報告する。

# 若手職員との話し合いを通じた自治研活動

島根県本部／雲南市職員労働組合・自治研対策部長 石田 誠

## 1. はじめに

自治研部では、職場の仲間や市民と一緒に、「『こうなるといいのに……』との思いを実現する」、ということをめざし、市民の共感を得るための「地域自治研」、そして、質の高い公共サービスを提供するための「職場自治研」の2つの柱に取り組んできた。

本レポートでは、自治研活動に若手世代である青年部を組み入れ、職場・世代の枠を超えた話し合いを行いながら進めた経過と具体的な取り組み、そして今後の展望について報告する。

## 2. 経 過

### (1) 第1回自治研部会での成功

上記のとおり、自治研部では、「地域自治研」と「職場自治研」の2つの柱に取り組んできた。今年度の具体的な取り組みを検討する中で、「地域自治研」については、昨年度このレポートでも報告した、ごみ減量に向けた取り組みを継続することとした。もう1つの柱である「職場自治研」については、部員による話し合いにより見出すこととし、部会を開催した。これが、想像していた以上に盛り上がったのがきっかけの1つである。

雲南市職員組合は一人一役制をとっており、組合員が何らかの役職に就くか、自治研部を含むいずれかの部に属することとなる。年代も、所属も全く違う組合員で部を構成するため、入庁1、2年の職員から、勤続20年以上の中堅、ベテランまでが、部会を開くと集うこととなる。

2021年の豪雨災害以降、多くの職員が入庁したこともあったことから、職場の環境改善に向けて、第1回の自治研部会において、『世代間ギャップ』と『暗黙（あんもく）知（ち）（職員それぞれの中にある言語化されていない技術や知識）』をテーマに話し合いの機会を設けた。

結果、「若い人に何を話していいかわからない」、「マニュアル作成が難しい（自分にとって当たり前でも、他の人にはそうでないこともある）」、「香典・餞別をどこまでするか等最初はわからない」等、様々な興味深い意見が非常に多く出された。

このことは、コロナ禍で集まる機会が減少していた中、職場、世代の枠を超えた話し合いを行うことが、職場環境改善の手掛かりになりそうだと感じた機会となった。



中堅・ベテランから入庁間もない職員まで、初めて顔を合わせた職員もいたが、和気あいあいと話し合いが行われ、多くの意見が出た。

## (2) 若手職員の声

もう一点、契機となったのは、若手職員からの職員提案である。当市では、新年仕事始め式の際に職員提案の表彰が行われる。今回表彰された提案内容は「新人職員の不安解消のためのOJT制度」であったが、その資料に、新人職員が入庁当時に困ったことが掲載されていた。

このことは、(1)に記載のとおり、第1回自治研部会できっかけをつかみ、深めていけると良いと感じていた、新人職員が分からない、困っていること、それを知らない、分からないベテラン職員との掛け違い、隙間を埋めることと通じる部分である。

以上、2つの経過を踏まえ、職場自治研に取り組むにあたり、自治研部員に加えて青年部員にも声をかけ、取り組みを進めていくこととした。

## 3. 取り組み

### (1) ステップ1 話し合い：テーマ「失敗談について」

普段、先輩として後輩に指導する職員も、多くの失敗を重ね、学び、教えてもらいながら今がある。全く失敗しない方がいいわけではないが、失敗しなくてすむなら、そのほうが良い。失敗を共有し、次に活かせることとしてテーマ設定した。具体的には、会計事務における失敗談と、社会人ルール・マナーに関する失敗談について話し合いを行った。



多くの青年部員が参加した。先輩の失敗談を笑いながら聞き、距離を縮めながらも、職員、社会人として知っておくと今後役に立つことを吸収していった。

## (2) ステップ2 話し合い：テーマ「地域を知る」

ステップ1の失敗談を踏まえ、失敗しないために必要な基本的なテーマとして設定した。経過の中で触れたとおり、2021年の豪雨災害以降多くの職員が採用されてきたが、雲南市出身ではない職員も多くいるようになった。新人職員研修でも僅かしか触れられておらず、地名をはじめ、観光地や名物などを知らない若手職員が多くいることが分かったため、地域について「知っておいたほうが役に立つこと」「知っておきたかったこと」「知りたいこと」、そして、それを「楽しく知る方法」について話し合いを行った。合併前の旧町村の括りが分からない、逆に言えば、市は1つとして認識しているとの意見がある一方、市の自然や食について、知らない若手職員が多いことを改めて認識した。



「楽しみながら」というキーワードがポイント。どうすれば楽しくできるか、だと話が盛り上がる。

## (3) ステップ3 実践：ごみ拾い&特産を知る

ステップ2において、楽しく雲南市のことを知る方法として出た意見が、デジタル上で知識として入れるのではなく、実際に現地に赴き、そして実際に食することであった。

そこで、地域自治研で定めた方針であるごみの減量化も組み合わせ、当市の誇る観光資源である斐伊川堤防桜並木のごみ拾いを行うとともに、終わった後には、これまた当市の名物焼き鯖寿司を食するという取り組みを企画、実践した。

桜は見ごろを過ぎ、花見を楽しむ市民に活動をPRすることまではできなかったが、多くの青年部員が参加したこともあり、雲南市の魅力を感じ取る良い機会となった。



意外とごみは落ちておらず、環境美化に対する市民の感覚に感服。ごみは少なかったが、多くの達成感、一体感が得られた。

#### 4. 今後の展望

今回、青年部の協力を得ながら、自治研活動に多くの参加、及び多くの意見をもらうことができた。冒頭にも記載したとおり、コロナ禍で集う機会が減少し、繋がりが希薄化した中、年代、職場の枠を超え、1つのテーマ、特に自身の職場環境改善につながる話し合いができるのは、組合の力、さらに言えば、自治研の魅力であると考えます。

なお、現時点では報告できないが、今年度の集大成として、職場、地域の「魅力」について話し合う機会を設けることとしている。魅力あるものについては、伸ばし、守っていき、逆に魅力がないものについては改善に向けて、次年度の取り組みに活かしていくつもりである。

昨年度隠岐の島町で開催された「しまね自治研集会」において、「職員として、組合員として、地域住民として矛盾しないように」との言葉があった。このことを肝に銘じ、困っているとの声を聞き、ともに考え、取り組みに移していく、そんな地味でありながらも、地に足着いた活動を積み重ねていきたい。